

第37回日本臨床皮膚科医会総会・ 臨床学術大会を終えて

(2021年4月23・24日)

※23日＝現地とWeb配信のハイブリッド開催、24日＝Web開催

早川 道郎

皮フ科早川クリニック院長

はじめに

第37回日本臨床皮膚科医会・臨床学術大会(以下、日臨皮総会と略す)が2021年4月23・24日の両日、帝国ホテル東京で行われました。緊急事態宣言が22日に発せられ、23日はハイブリッド、24日はWebという変則的な開催形式で行われました。参加人数は1,750名を越え、コロナ感染を発生させることなく無事終了することができました。ご参加いただきました先生方には厚く御礼申し上げます。

テーマとロゴマーク

テーマは、人体の最前線で戦う皮膚、隠された謎の多い神秘的皮膚、ときには芸術的な美しい皮膚、そこに立ち向かう皮膚科医の気持ちを「美しい皮膚への道」と表現させていただきました(図1)。また、ロゴマークは、東京で働く人々に多くの夢や希望を与えてきた、東京の新旧のシンボル、東京タワーと東京スカイツリーを図柄としました(図2)。



図1 総会テーマビジュアル



図2 総会ロゴ

特別講演・シンポジウム

国立国際医療研究センター国際感染症センター

長の大曲貴夫先生に、「COVID-19」について、貴重な講演をしていただきました。また、この総会の1つの特徴である保険診療についての講演は、日本医師会の松本吉郎常任理事ならびに厚生労働省の原澤朋史課長補佐にお願いしました。

シンポジウムでは、明日への診療に役立つ内容を数多く用意しました。また、他科との境界領域疾患について、東京都各科医会協議会で共働している整形外科および精神神経科の先生より講演をしていただきました。

ポスター部門

会期中だけではありますが、はじめてポスター発表をライブで配信できるようにしました。今総会は東京都皮膚科医会(東京ブロック)が主管で、当医会から日常診療に役立つ演題に医会賞をつくり、弘前大学の赤坂英二郎先生と赤穂市民病院の和田康夫先生のお二人に授与いたしました。

また、マルホ・高木皮膚科学振興財団協賛の最優秀ポスター賞は、順天堂大学医学部附属浦安病院の栗原麻菜先生、優秀ポスター賞は慶應義塾大学の八代聖先生、日本大学の葉山惟大先生、福岡大学の宮地素子先生の3名が受賞されました。

総会開催記念品

『皮膚科医のための外来英会話 改定第2版』を作成し、総会参加者全員に電子書籍としてお配りしました。これは、2000年の第16回日本臨床皮膚科総会(会頭、楠俊雄先生)時に編纂したものを参考に改定

したものです。なお、これは医書.jpで販売(3,300円)もしています。

今総会について

日臨皮総会は、毎年、全国の10ブロックがもちまわりで担当して行われています。松山、浜松に続き、今年は東京で開催されました。開催地ではブロックをあげて、いらっしゃる先生方をお迎えし、郷土色豊かな催しなどを準備しております。しかし、昨年からのコロナ禍が長引き、今回も楽しい懇親会、アトラクションなどは中止になり、東京を楽しんでいただけなかったことはまことに残念でした。このような状況でありながら、ハイブリッド形式の1日で530人以上の先生が来場されたことは感激であり驚きでした。もとのリアル開催への強い期待がうかがえました。

開催間際の前日に緊急事態宣言が発せられ、急遽、2日目はWeb開催へと変更を余儀なくされました。そのため、多少の混乱も生じ、一部では予定していた座長の先生が来場できなくなり、慌しく補助座長を準備しました。また、日医専門医講習の単位はWebでは認められず、参加をご希望された先生方にはたいへんご迷惑をおかけしました。

東京都皮膚科医会の総力をあげて総会を行いました。協賛会社、運営会社、会場の帝国ホテルなどの協力なくして、このコロナ禍で、無事終わることができませんでした(図3, 図4)。改めて、ご参加いただいた先生方、ご協力いただいた各方面の方々に深く感謝いたします。

なお次回総会は、鹿児島で行われます。



図3 日臨皮会長・江藤隆史先生(左)と筆者



図4 学会合同写真